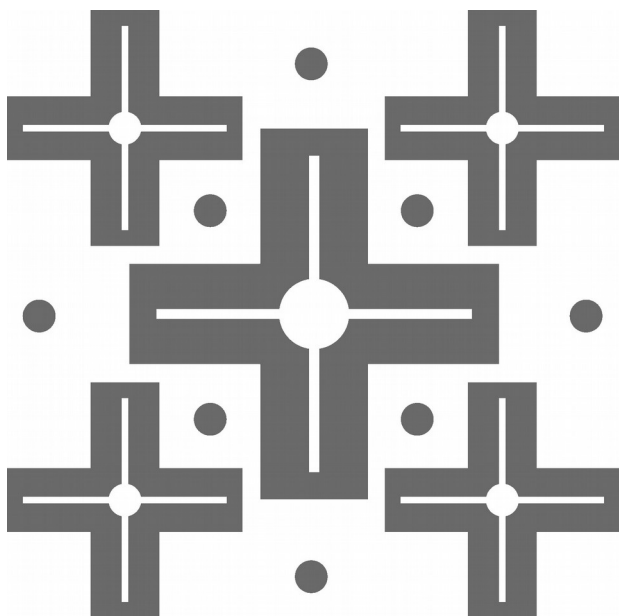


日々の聖句

8月 教会



教会の主よ。私たちを新たにしてください。

あらゆるものの上におられるキリストよ。

私たちの変わらぬ目当てよ。

聖霊の火よ。私たちの賜物を燃やしてください。

聖霊の風よ。生ける炎をかきたててください。

恐れや失敗、勇気を失った意志から解放され、

疲労と無益な労苦のただ中から

私たちはキリストに立ち返ります。

教会のあるべき姿へと、私たちを導いてください。

Lord of the Church, we pray for our renewing:

Christ over all, our undivided aim.

Fire of the Spirit, burn for our enduing,

wind of the Spirit, fan the living flame!

We turn to Christ amid our fear and failing,

the will that lacks the courage to be free,

the weary labours, all but unavailing,

to bring us nearer what a church should be.

— Timothy Dudley-Smith

わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。(18)

マタイ16・15~19はキリストの「教会設立宣言」です。この箇所には多くのことが語られていますので、数回に分けて、黙想します。

ここで第一に心に留めたいのは、教会は誰のものかということです。「私の教会」や「○○先生の教会」などと言われますが、それは「私が所属している教会」、「○○先生が牧会する教会」という意味で、決して「私が所有している教会」、あるいは「○○先生に属している教会」ではないはずです。キリストが「わたしの教会」と言われたように、教会はキリストのもので、ところが私たちは教会を、この世の会社や団体と同じように、そこにいる誰かをオーナーや支配者にしてしまい、教会の真のオーナー、統治者がキリストで

あることを忘れてしまうことが多いのです。初代教会で、すでにそのようなことがありました。第三ヨハネ1・9には、「かしらになりたがっている」ディオテレペスという人物が教会を私物化し、牛耳ろうとしていたことが書かれています。

特定の人たちが自分たちの思い通りのことをするために教会をかき回すことがあります。そのようなとき、私たちはそれに対して「ノー」を言い、「ここはキリストの教会である」と言い切ることができるでしょうか。教会を「キリストのもの」として保つために、私たちがしなければならぬことが何なのかをしっかりと学びたいと思います。

祈り 教会の主よ。教会があなたのものであることを身をもって表すことのできる私たちとしてください。

そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。(18)

イエスがその上にご自分の教会を建てると言われた「この岩」とは何でしょうか。多くの人は、それは「あなたは生ける神の子キリストです」(16)という「信仰告白」であると言います。しかし、そこに「信仰告白」の箇条がかかげられているからといって、そこが教会になるわけではありません。どんなに立派な信仰のステートメントが掲げられていても、人々がそれを本気で信じていなければ、また、その告白に生きていなければ、そこを教会と呼ぶことはできないでしょう。「この岩」とは、イエスをキリストであると信じ、信仰告白」だけでなく、そのように「信じ、告白する人」、さらにはその「信仰の告白に生き

る人」を指しています。

キリストはシモンを「ペテロ」(岩)と呼んで、「この岩の上に」と言いました。「この岩」とは、明らかに「人」を指しています。キリストはペテロを特別に取り扱って初代教会の礎としました。しかし、教会は一個人だけで成り立つわけはありません。キリストから「岩」と呼ばれたペテロ自身が「あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ：」(第一ペテロ2・5)と言っています。信仰者の各々が「岩」であり「石」です。すべての信仰者がキリストによって組み合わせられ、教会が建てられていくのです。教会は信仰者によって成り立つのです。祈り 教会の主よ。私もまた、あなたの教会が建てられていく「岩」のひとつであることを自覚させてください。

バルヨナ・シモン、あなたは幸いです。このことをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父です。(17)

イエスがその上にご自分の教会を建てると言われた「この岩」(18)は直接的には、イエスをキリストと告白した「ペテロ」のことですが、ペテロと同じ信仰を言い表した他の使徒や弟子たち、さらに、今日に至るまでの、すべての信仰者も意味されています。教会はキリストを信じる人々、その信仰を告白する人々、その告白に生き、キリストに従う人々によつて建てられます。

しかし、どんなに優れた信仰者も、人間である以上、罪を持ち、弱さがあります。「あなたは生ける神の子キリストです」とイエスへの信仰を言い表したペテロは、後に、「そんな人は知らない」と三度もイエスを否定しています(マタイ

26・69〜74)。そんな人間の上に教会が立てられるのはなんと危ういことでしょう。しかし、イエスはそれを承知の上でペテロを選び、私たちを選びました。それは、教会が人間の力によつてではなく、神の恵みによつて建てられるためでした。

イエスは「バルヨナ(ヨナの子)・シモン」を「ペテロ」と呼びましたが、「バルヨナ・シモン」を「ペテロ」に変えたのは神の恵みです。人間シモンが使徒ペテロとなったように、私たちも恵みによつて「生ける石」(第一ペテロ2・5)となつて、キリストの教会に築きあげられるのです。この恵みにしつかりと立ちましよう。

祈り 教会の主よ。私たちの人間的な罪深さ、弱さにかかわらず、私たちを用いて教会を建ててください。あなたの恵みを感謝します。その恵みによつて変えられていく私たちとしてください。

よみの門もそれに打ち勝つことはできません。(18)

「天の御国」は聖なるものであつて、誰もがそこに入れるわけではありません。天の御国に入るには、罪ある者には閉ざされている扉を開ける「鍵」が必要です。ところが「よみの門」は常に開いています。よみはすべての者を呑みこんでもなお飽き足らないのです。

しかし、教会は「よみの門」に打ち勝ち、天の扉を開きます。なぜなら、教会は、ご自分の死によつて死を滅ぼし、復活したキリストのものだからです。キリストはスミルナにある教会にこう告げました。「あなたが受けようとしている苦しみも、何も恐れることはない。…死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。…勝利を得る者は、決して第

二の死によつて害を受けることはない。」(黙示録2・8～11) 教会は、多くの殉教者を出しましたが、肉体の死は信仰者を滅ぼしませんでした。

人は死んで無になるのではなく、その霊と人格は残り、キリストの審判によつて命か死かのどちらかに定められます。肉体の死は「第一の死」と呼ばれ、死後の裁きは「第二の死」と呼ばれます。第二の死は、第一の死よりも恐ろしいものです。人が死を恐れるのは、死後の裁きがあるからです。しかし、復活の主に結ばれた者は肉体の死を体験しても、第二の死を体験することはありません。教会は、キリストによつて死に打ち勝った者たちの集まりなのです。

祈り 教会の主よ。あなたの復活によつて教会が「よみの門」に勝利し、天の扉が開かれていることを感謝します。

わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。(19)

イザヤ22章に、ヒゼキヤ王の宮廷に仕えた執事シエブナがその地位を追われ、代わりにヒルキヤの子エルヤキムに「ダビデの家の鍵」が与えられることが預言されています。「彼が開くと、閉じる者はなく、彼が閉じると、開く者はない」(イザヤ22・22)とあるように、「ダビデの子」であり、御国の王であるイエスは、使徒たちを王宮の執事とし、天の倉庫を開け、恵みの宝物を取り出す権限を与えました(マタイ13・52、ルカ12・42)。

ヨハネ20・23に「あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。赦さずに残

すなら、そのまま残ります」とあるように、御国の鍵は罪の赦しに関わりがあります。教会に託された福音は「罪の赦しを得させる悔い改め」の福音(ルカ24・47)です。「罪を赦していただくために、悔い改めて、…バプテスマを受けなさい」(使徒2・38)とあるようにバプテスマは罪の赦しと結びついており、「これは…罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です」(マタイ26・28)とあるように、主の晩餐もまた罪の赦しを宣べ伝えていきます。教会に与えられた「鍵」は「赦しの福音」です。教会はキリストによる赦しの恵みを人々に宣べ、教え、確認させることによつて、天の門を開くのです。

祈り 教会の主よ。教会に託された福音の鍵をもつて、天の門を開く、忠実なあなたのしもべとしてください。

それでもなお、言うことを聞き入れないなら、教会に伝えなさい。教会の言うことさえも聞き入れないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。(17)

キリストが与える罪の赦しの恵みは私たちが思う以上に豊かなものです。しかし、それは安易な恵みではありません。悔い改めや信仰が伴わないまま機械的、形式的に与えられるものでもありません。ましてや罪を「見て見ぬふりをする」ことが罪の赦しであってはなりません。

マタイ 18章には教会のまじわりについてのイエスの言葉がまとめられていて、教会の中で「小さい者」を軽んじないように教えられています(10)。「兄弟」が自分に罪を犯した場合、最初はふたりだけで、次はふたりか三人の証人と共に、その罪を指摘し、それでも聞き入れない場合

は「教会」に申し出るという手続きが定められています(15～16)。ここから、教会には教会内の問題を自ら解決する司法的な力が与えられていることが分かります(第一コリント6・1～2、第一テモテ5・19)。教会には、罪を扱い、赦す務めが与えられているのです。

しかし、「教会の言うことさえも聞き入れないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい」というのは何を意味しているのでしょうか。イエスは異邦人もまた神の民とされることをご存知で、取税人をも受け入れてくださったお方です。この言葉は、マタイ 18・21～35で教えられていることの光のもとで理解されるべきでしょう。祈り 教会の主よ。教会の中で罪の赦しが正しく理解され、行使されますように。教会が、真実な赦しの場となりますように。

網は百五十三匹の大きな魚でいっぱいであった。(11)

ペテロは、かつて、「大漁の奇蹟」を見て、「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから」と言つてイエスの足もとにひれ伏したことがあります。その時イエスはペテロに「恐れることはない。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです」と言つて、彼を弟子としました(ルカ5・1～11)。

復活の後、イエスが弟子たちをガリラヤ湖に導き、「大漁の奇蹟」を再現したのは、その時の召命を再確認させるためでした。イエスは岸边で炭火をおこして待つていました。ペテロは、大祭司官邸の中庭で炭火のそばで暖まっていた時に、イエスを三度否定しましたので(ヨハネ 18・18)、「炭火」はペテロにその時のことを思い起

こさせたかもしれません。しかし、イエスの用意した炭火は和解の食事のためのものでした。ペテロは完全な赦しを体験し、教会の牧者としての使命を授けられました。

この時に捕れた魚の数が「百五十三匹」と記録されていますが、これは、宣教の使命を教えてください。当時、魚類は「百五十三」に分類されました。「百五十三」は「すべての魚」を意味します。以前弟子たちはユダヤの人々にしか遣わされませんが、これからは、地上のあらゆる民族、地域、階層の人々への宣教に遣わされていくのです。「百五十三」という数字はそのことを示しています。

祈り 教会の主よ。私たちを召命の原点に導いてください。「すべての人」の救いのため、祈り、働くことができる者としてください。

彼らはみな、…いつも心を一つにして祈っていた。(14)

イエスは「『わたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではないか。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしてしまった」(マルコ11・17)と言って、「宮清め」をしました。神殿に「祈りの家」であるよう求めたイエスは、聖霊の宮である教会にも同じように「祈りの家」であることを求めています。

イエスの昇天から九日の間、百二十人の弟子たちは祈りに専念し、そしてペンテコステを迎えました。祈りの集団がそのまま教会となったのです。教会は常に祈りの群れでした。ことあるごとに集まって祈りました。神殿でペテロが捕まえられた時、教会は共に集まり祈っていました。釈放されたペテロはすぐにその祈りの集いに行つて自

分の身に起こったことを報告しました。すると人々は「心を一つにして」祈り、神は、人々を聖霊に満たしてその祈りに答えました(使徒4・24~31)。

後に、ペテロが投獄された時も「教会は彼のために、熱心な祈りを神にささげ」(使徒12・5)、その祈りのゆえにペテロは獄から救われました。

黙示録に描かれている天の教会は香の煙で満ちていましたが、その「香」は「聖徒たちの祈り」でした(黙示録5・8、8・3、8・4)。神の救いの計画は、聖徒たちの祈りによってひとつひとつ成就していくのです。

祈り 教会の主よ。私たちの教会を「祈りの家」とし、「聖徒たちの祈り」を用いて、みこころを成し遂げてください。

ところが、彼らの中にキプロス人とクレネ人が何人かいて、アンティオキアに来ると、ギリシア語を話す人たちにも語りかけ、主イエスの福音を宣べ伝えた。(20)

イエスは「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります」(使徒1・8)と言って、教会にエルサレムから地の果てまで広がっていくことを命じましたが、教会は、初めはエルサレムにとどまったままでした。ところが、ステパノの殉教を機に、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされた人たちが(使徒8・1)、寄留先の町々で福音を伝え、教会は「ユダヤ、ガラヤ、サマリアの全地にわたり築き上げられ」(使徒9・31)るようになりました。使徒9・31

は「こうして、教会は：」という言葉で始まっていますが、この「こうして：」は使徒8・1に遡ります。教会への迫害が教会を拡散させ、キリストの宣教命令が実行されるのを助けたのです。

アンティオキアにできた教会もまた、迫害によつて散らされた人々によつて始まりました。聖霊はアンティオキアの教会に、バルナバとサウロを宣教に送り出すように告げました(使徒13・1～3)。バルナバとサウロのふたりを送り出すのは、大きな痛手でしたが、教会は聖霊の声に従いました。そして、教会は、主の言葉の通り、「地の果て」まで拡大していったのです。

祈り 教会の主よ。あなたは迫害やかつての迫害者サウロさえも用いて宣教を拡大してくださいました。あなたの摂理を信じ、困難の中でも宣教の拡大を祈る者としてください。

聖霊と私たちは、次の必要なことのほかには、あなたがたに、それ以上のどんな重荷も負わせることのないことを決めました。(28)

異邦人への伝道が進んだとき、異邦人キリスト者にもユダヤの律法を守らせるべきだという主張が起こりました。しかし、ペテロもパウロも異邦人にユダヤの律法の重荷を負わせるべきではないと信じていました。それはふたりが異邦人の間でなされた聖霊のみわざを体験していたからでした。この問題について教会会議が開かれた時、使徒たちや長老たちはふたりの証言に耳を傾けました(使徒15・7～12)。そして、会議は結論に達し、決議文が作られ、アンテيوخア、シリア、キリキアにある異邦人教会に届けられました。その決議文には「聖霊と私たちは…」とあって、教会会議における聖霊の導きが表明されている。

ます。決議文にそう書くことができたのは、そこに聖霊の臨在と、聖霊の導きを求める深い祈りがあつたからでした。

しかし、教会の会議や話し合いがいつもそうであるとは限りません。聖霊の臨在と導きを求める祈りが欠ける時、声の大きな人の無責任な意見が通つたり、人間的で妥協的な提案がなされたり、多数決だけでものごとが決められるようになっていきます。教会では、どんな話し合いであつても、聖霊の導きを求めてなされるべきです。まして、大切な事柄においては、「聖霊と私たちは…」という確信に至るまで、一同が祈り深くみこころを祈り求めていくべきです。祈り 教会の主よ。私たちの会議が聖霊に導かれ、みこころを求め、それに従うものでありますように。

あなたがたは自分自身と群れの全体に気を配りなさい。神がご自分の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになったのです。(28)

パウロはどの町でも、教会ができる、長老を立て、その群れを委ねました(使徒 14・23)。28節で、長老は「教会を牧す」ので「牧者」と呼ばれ、「群れの監督」であるので「監督」とも呼ばれました。後の時代に、教会での役職が様々な名前と呼ばれ、役割に区別が生じるようになりますが、この時には、監督、長老、牧師という呼び名はどれも同一の教会の指導者を指していたようです。

長老の役割には、「たましいの見張り人」(ヘブル 13・17)としての役目がありますが、それと同時に、「御言葉の宣教」という務めもありま

す。「偽教師が入り込み、人々が正しい教えから離れ、分派をつくる人たちが起こる」と、パウロが予告したように、初代教会は、迫害に耐えると共に、分派と戦わなくてはなりませんでした。そのためには、「みことばと教えのために労苦している長老」(第一テモテ 5・17)が必要でした。それでパウロは、監督でも長老でもあったテモテに「自分自身にも、教えることにも、よく気をつけなさい」(第一テモテ 4・16)、「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くて悪くてもしつかりやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい」(第二テモテ 4・2)と教えたのです。

祈り 教会の主よ。教会を御言葉によって保ってください。御言葉の奉仕をする人々を守り、それを正しく行うことができるよう導いてください。

私と教会全体の家主であるガイオも、あなたのためによろしくと言っています。市の会計係エラストと兄弟クアルトもよろしくと言っています。(23)

パウロはローマ人への手紙の最後の一章を使って、ローマにいる彼の知人に「よろしく」と言っています。また、この手紙を書いたときパウロと一緒にコリントにいたテモテ、ルキオ、ヤソン、ソシパテロ、ガイオ、エラスト、クアルトからも「よろしく」と言っています。この手紙を筆記したテルティオも、パウロの許可を得てでしょうが、みずからの挨拶を記しています。

こうした箇所から分かることは、パウロの周りには多くの献身的な人々がいて、パウロが彼らを「同労者」と呼んだように、チームワークで伝道と教会形成がなされたということです。ローマ

16・3〜4に名前が記されているプリスカとアキラ夫妻はコリントとエペソでパウロと共に働き、命がけてパウロを守った人たちです。

また、当時はまだ教会堂というものがありませんでしたので、裕福な人たちの大きな家の一部が礼拝のために使われました。ガイオは自分の屋敷を教会と、パウロの住居として提供しましたので、「家主」と呼ばれています。教会は霊的、また実際のなさまざまな奉仕によって成り立っています。パウロはコリント第一12章で教会は「キリストのからだ」であると言っていますが、パウロにとってそれは単なる理論ではなく、コリントの地で実際に体験したことだったので。祈り 教会の主よ。あなたの働きはひとりで行えるものではありません。共に働く人々の仲間に私をも加えてください。

コリントにある神の教会へ。すなわち、：キリスト・イエスにあつて聖なる者とされ、聖徒として召された方々へ。(2)

コリントの教会には分裂がありました(第一コリント1・11)。人々は靈的に未熟でした(3・3)。思い上がり、自己満足に浸っていました(4・7、8)。不品行(5・1)、裁判沙汰(6・1)などがあり、聖餐が正しく守られず(11・20)、礼拝の秩序が乱れていました(14・40)。「死者の復活」を否定する者もいました(15・12)。パウロは諸教会にユダヤの教会のための献金を呼びかけましたが、経済的に豊かなコリント教会は、貧しいマケドニア地方の教会に遅れをとっています(第二コリント8・1~5)。

コリントの教会には数多くの問題があり、神への愛や他者への愛において欠けたところがありま

した。しかし、それでも、「神の教会」と呼ばれ、そのメンバーは「聖徒」と呼ばれています。

その中に、本物の聖徒が残っていて、パウロの心からの勧めを聞いて悔い改める人がいたからでしょう(第二コリント7・8~11)。地上の教会にはさまざまな問題があり、「問題の人」もいます。それを当たり前のこととして受け入れることが、教会への愛ではありません。問題を解決し、きよめられ、成長を求めることが、教会を愛することです。キリストご自身がそのように教会を愛しておられるのですから、私たちがそうしないでいることはできません。

祈り 教会の主よ。あなたは、教会への愛を聖書の中に表しておられます。私たちを、その愛に答え、教会がきよめられるために祈り、励む者としてください。

パンは一つですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから。(17)

「彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた」(使徒2・42)とあるように、「使徒たちの教え」と「交わり」と「パン裂き」と「祈り」は教会を支える四本柱でした。「週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった」(使徒20・7)とあるように、「聖餐」は「教え」「交わり」「祈り」と共に主の日の礼拝の重要な要素でした。

「私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです」(第一コリント12・13)とあるように、バプテスマは信じる者を

「キリストのからだ」に結びつけますが、そのからだを養うのが聖餐です。ともにひとつのパンに与ることによって、教会は、一致と調和のあるキリストのからだとなっていくのです。教会は共にパンを裂く「聖餐共同体」であると言つてよいでしょう。聖餐によってひとつにされていく教会の交わりは、人種や言語、歴史や伝統、神学や理念、また、人間的なものによってつながっている団体に勝つて、確かなものであり、麗しいものなのです。聖餐を守る頻度や形式は教会によって異なっていますが、最も聖なるものによって結ばれ、養われることにおいては、どの教会も同じであつてほしいと願います。

祈り 教会の主よ。ひとつのパンによって生かされ、結び合わされ、養われていく私たちとしてください。

皆の益となるために、一人ひとりに御霊の現れが与えられているのです。(7)

きよさの箇所に続く8~10節には、「知恵のことば、知識のことば、信仰、癒やし、奇跡を行う力、預言、霊を見分ける力、種々の異言、異言を解き明かす力」が挙げられていますが、聖霊の賜物はそうしたもののだけに限られません。「預言、奉仕、教え、勧め、分け与えること、指導、慈善」(ローマ12・6~8)なども含まれます。

第一ペテロ4・10は「それぞれが賜物を受けている」と教えています。信仰者で聖霊の賜物を受けていない人は誰ひとりありません。聖霊の賜物が「御霊の現れ」と呼ばれているからといって、すべてが人目を惹くものとは限りません。聖霊ご自身が隠れた働きをするように、「隠れた御霊の現れ」もあるのです。

誰もが聖霊の賜物を用いて奉仕するのですが、忘れてならないことは、賜物が、主から、教会のために与えられているものであって、決して自分のもんでも、自分のためのもでもないということです。教会での奉仕は、自分の好きなことや得意なことをするためのものではありません。教会の奉仕は「生きがい」や「自己実現」のためにする活動でもありません。聖霊の賜物についての誤解が「奉仕」と「活動」の取り違えを生み、教会を単なる「活動の場」にしてしまうことがないように、祈り、求めていきましょう。

祈り 教会の主よ。私に与えられている聖霊の賜物が何であるか教えてください。また、どうしたら、それを自分のためでも、活動のためでもなく、主のために、奉仕のために用いることができているのかを教えてください。

一人ひとり、いやいやながらでなく、強いいられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださいさるのです。(7)

「分け与えること」(献金)は聖霊の賜物のひとつで(ローマ12・8)、「恵みのわざ」(第二コリント8・6、7、8・19)と呼ばれています。この賜物によって教会は建てられ、また、支えられます。

聖書には「週の初めの日に」「収入に応じて」(第一コリント16・2)、「自ら進んで」「力に応じて」「力以上に」(第二コリント8・3)、「あらかじめ用意し」「惜しまずに」(第二コリント9・5)、「いやいやながらでなく」「しいられてでもなく」「心で決めたとおりに」「喜んで」与える(同7節)などの献金について

の具体的な指示があります。

私たちが得る金銭は、もとはといえば神から受けたものです。働く機会や健康、能力を備えてくださったのは主ですから、献金は神への感謝を表す「返金」だと言ってよいでしょう。しかし、神は献げる人を祝福し、その人に報いてくださいます。私たちが、「まず自分自身を主に献げ」(第二コリント8・5)、それから金銭を献げるなら、献金は教会の必要を満たすだけではなく、人々への「愛の証拠」(第二コリント8・24)となり、献げる者を豊かにし、神への感謝や人々への証しとなり、互いの交わりを深めるのです(第二コリント9・11、14)。献金はまさに「ことばに表せないほどの賜物」(同15節)です。

祈り 教会の主よ。私を「喜んで与える人」とし、献金の豊かな祝福に与らせてください。

また、神はすべてのものをキリストの足の下に従わせ、キリストを、すべてのものの上に立つかしらとして教会に与えられました。(22)

さまざまな団体や組織の中には、著名人を名目の代表や名誉職、顧問などに迎えているところがあります。また、芸能人を名誉観光大使や一日警察署長などに起用することもよくあります。宗教団体でも、芸能タレントやスポーツ選手などの信者を「広告塔」として利用することがあります。しかし、教会にはそんな必要はありません。なぜなら教会のかしらは、あらゆるものの上に立つお方、イエス・キリストだからです。しかも、キリストは名目上、あるいは名誉職として教会の「長」だというではありません。実際に教会の頂点に立ち、教会を生かし、その主として支配しておられるのです。

ピリピ2・9～11に「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました」とある通り、イエス・キリストはあらゆるものの上に君臨しておられるお方です。キリスト者は、主のゆえに地上の権威に従い、尊ぶべき者を尊び、他者を卑しめることはしませんが、真理や信仰を脅かすものがあれば、それがどんな地上の権威であっても、人々の間で榮譽を持つ者であっても、それを斥け、「かしら」であるイエス・キリストに従います。初代教会がローマ皇帝さえも恐れず、キリストに従うことができたのは、至高者であるキリストが教会のかしらであることを知っていたからです。

祈り 教会の主よ。あなたがかしらであることを忘れ、世の力に抑え込まれることがないよう、あなたの教会を守り、助けてください。

あなたがたも、このキリストにあつて、ともに築き上げられ、御霊によつて神の御住まいとなるのです。(22)

教会は「神の民」です。キリスト者は異邦人であつても、イスラエルと同じ神の民とされていきます。イスラエルと異邦人とを分け隔てていたものがキリストの十字架によつて取り除かれ、両者がひとつの「キリストのからだ」となつたのです(エペソ2・14~16)。そればかりでなく、両者は共に築き上げられて神の御住まいとなります。教会は「神の民」、「キリストのからだ」、そして「聖霊の宮」(第一コリント3・16、6・19)なのです。

私たちの救いは、どんな場合でも「キリストにあつて」「聖霊によつて」なされるのですが、教会もまた、キリストにあつて、聖霊によつて「神

の民」とされ、またひとつの「からだ」となり、「神殿」となつていきます。父・子・聖霊の神が教会を生み、育て、生かし、建てあげておられるのです。世に対しては神の民として御言葉を伝え、みずからに対してはキリストのからだとして成長し、神に向かつては聖霊の宮として神を礼拝するものでありたいと思います。教会が「神の民」、「キリストのからだ」、また「聖霊の宮」であると知るだけにとどまらずに、そのようなものとして造られ、生み出され、名付けられていることの意味をさらに学び、教会がみこころにそつたものとなることを求め続けていきたいと思ひます。

祈り 教会の主よ。私たちが神の民であること、キリストのからだであること、聖霊の宮であることを知り、実践することができますように。

いまだかつて自分の身を憎んだ人はいません。むしろ、それを養い育てます。キリストも教会に対してそのようになさるのです。(29)

キリストと教会との関係は、「羊飼いと羊」(ヨハネ 10・9)、「ぶどうの木と枝」(同 15・5)、「土台と建物」(第一コリント 3・9~11)、「かしらとからだ」(コロサイ 1・18)など、さまざまな比喩で表現されています。もつとも、「土台と建物」や「かしらとからだ」は比喩以上のもので、教会は実際に「神の宮」であり、「キリストのからだ」なのですが、これらは、キリストと教会との密接な結合を表し、教会がどんなにかキリストに依存しているかを告げています。羊は羊飼いなしに生きていけず、枝は幹から切り取られたなら刈れてしまい、建物は土台なしに建たず、からだはかしらなしでは死んだも

のです。

しかし、同時に羊飼いは羊を、木は枝を、土台は建物を、かしらはからだを必要とします。きよいうの箇所ではキリストが「夫」、教会が「妻」として描かれています。夫と妻も互いが互いを必要とします。キリストは教会をご自身と対等なものであるかのように尊重し、教会をご自身のように取り扱ってくださることが、この比喩で描かれています。キリストがかしらであり、教会がからだであるというのは深遠で偉大な「奥義」です。キリストの愛を知り、キリストのきよめに与り、キリストに仕えることによつて、私たちはこの奥義を悟り知つてくのです。

祈り 教会の主よ。教会があなただからであることの奥義をさらに深く理解できますよう、私たちを教え、導いてください。

あなたがたが最初の日から今日まで、福音を伝えることにともに携わってきたことを感謝しています。(5)

教会の「四本の柱」は「教え」と「交わり」、「パン裂き」(聖餐)と「祈り」です(使徒2・42)。二番目の「交わり」はギリシャ語で「コイノニア」と言い、聖書では様々な意味に使われます。ピリピ人への手紙にはこの言葉が三つの箇所に使われています。1・5では「福音を伝えることにともに携わってきた」と訳されていますが、直訳すれば「福音のコイノニア」です。2・1では「聖霊の交わり」、3・10では「キリストの苦難にあずかる」と訳されています。

今日の教会では「交わり」というと、一緒に食事をしたり、ゲームを楽しんだり、おしゃべりをしたりという意味で使われますが、初代教会で

は、ともに福音の宣教のために働いたり、互いに信仰を励まし合ったり、慰めあったりすること、さらには、キリストのために共に苦難に耐えることを意味していました。レクレーションやエンターテインメントの意味では使われませんでした。共に主を礼拝し、祈り、奉仕や伝道に携わること自体が「交わり」でした。

「福音のコイノニア」は福音の宣教を意味しますが、それ以前に、ひとつの福音によって結び合わされていることも意味しています。ピリピのキリスト者はパウロから聞いた福音を堅く守ってきたからこそ、福音の宣教にも参加することができたのです。教会が福音を信じ、福音を生き、福音を伝えるコイノニアであるよう祈りましょう。

祈り 教会の主よ。私たちの「交わり」を聖書が教える「コイノニア」としてください。

私は、キリストのからだ、すなわち教会のために、自分の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。(24)

「キリストの苦しみの欠けたところ」とは何を意味しているのでしょうか。キリストはその苦しみによって完全な者とされ、永遠の救いの源となりました(ヘブル5・8、9)。キリストは欠けない大祭司となつて、完璧な犠牲を献げ、私たちのために完全な救いを勝ち取ってくださいました。私たちが救うためのキリストの苦しみのどこに欠けがあるのでしょうか。

ここでの「キリストの苦しみ」は、私たちの救いのためのものではなく、教会が成長していくためのものです。教会は反対者たちのまっただ中に生まれ、最初から迫害を受けました。キリストはこの教会の苦しみをご自分の苦しみとしました。

ダマスコへの途上でパウロに現れたキリストは「パウロ、パウロ、なぜわたしを迫害するのか」と言いました。キリストが、「なぜ教会を：」でなく、「なぜわたしを：」と言ったのは、キリストのからだである教会に加えられた苦しみをご自分の苦しみとされたからです。

この言葉を聞いて回心したパウロは、最初から教会のための「キリストの苦しみ」を知り、その苦しみに与ることを体験していました。パウロのからだには、キリストのために受けた鞭打ちの傷がありました(ガラテヤ6・17)、それは教会のための「キリストの苦しみ」のしるしでした。祈り 教会の主よ。あなたが教会の苦しみを担ってくださいることを感謝します。私たちもその苦しみに与ることによって、教会のきよめと成長に奉仕することができますように。

この手紙があなたがたのところまで読まれたら、ラオデイキア人の教会でも読まれるようしてください。あなたがたも、ラオデイキアから回って来る手紙を読んでください。(16)

パウロが諸教会に宛てて書いた手紙は、その教会だけで終わらず、写しが作られて、近隣の教会に配布されました。初代教会の礼拝では、ユダヤの会堂の礼拝に倣って聖書が朗読されましたが、パウロの手紙もまた礼拝で朗読され、やがて聖書に加えられるようになりました。

黙示録にエペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルデイス、フィラデルフィア、ラオデイキアの七つの教会にキリストのメッセージが届けられましたが、これらの教会は順序正しく並んでおり、それは使徒たちの書簡が回覧された順序だったかもしれませぬ。コロサイはラオデイキ

アの南東すぐ近くに位置しています。ラオデイキアとコロサイの教会は、パウロの手紙を互いにやりとりしていました。

エペソ人への手紙の冒頭に「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロから、キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ」とありますが、「エペソの」の部分が省略されている写本があります。それはこの書簡がエペソばかりでなく、他の地域でも読まれるとき、人々はそのに自分たちの地域の名前を入れて読んだからかもしれない。初代教会はそのようにして、使徒たちの書いたものを吟味し、受け入れ、後の世代に遺したのです。

祈り 教会の主よ。あなたは教会に聖書を与え、教会はそれを守り伝えてきました。私たちも次の世代に正しく伝えることができますように。

また、教会の外の人々にも評判の良い人でなければなりません。嘲られて、悪魔の罠に陥らないようにするためです。(7)

二〇一八年一二月の調査によるとアメリカで倫理的に信頼されている職業は信頼度が高い順から看護師、医師、薬剤師、高校教師、警察官、会計士、納棺師、聖職者の順で、牧師や神父への信頼は必ずしも高くありません。今日では信徒が聖職者に求めるのは専門的な知識や「上手な」説教、また教会運営の能力などで、人格的なものではなくりました。敬虔で忠実な牧師よりも、手腕のある牧師に人気があるのが現実です。しかし、聖書は、教会の指導者に「自分自身にも、教えることにも、よく気をつけなさい」(第一テモテ4・16)と教え、指導者が真理を保ち、みずからも真理に生きingことを求めています。牧師の務めは

「人気」や「能力」で行うことができず、ありません。「どう働くか」だけでなく、「どう生きるか」が問われるのです。

それは、教会のすべての奉仕者にとっても同じで、執事にも「品位があり、二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利を求めず、きよい良心をもつて、信仰の奥義を保っている」(第一テモテ3・8~12)ことが求められています。「信仰の奥義」は知的なものだけで守り、保つことはできません。その人の生き方が問われます。「執事」には「奉仕者」という意味がありますので、すべて教会で奉仕する者には、信仰にふさわしい人格が育ち、生活が確立していることが求められるのです。

祈り 教会の主よ。教会を、人格的なものが大切にされ、それが養われる場所としてください。

そうすれば、教会は本当のやもめを助けることができます。(16)

聖書では「やもめ」と「孤児」は社会的弱者を代表するもので(申命記24・17)、教会は当初から「やもめ」を援助してきました(使徒6・1、ヤコブ1・27)。きょうの箇所には「やもめの名簿」(9節)があつて、教会が組織的に彼女たちを援助していたことが書かれています。初代教会は、その他に奴隷の身分の人たちのために、彼らが自由になるための「贖い金」が積立てられていたことも知られています。

しかし、教会はこうした援助を無制限には与えませんでした。家族がいる場合は家族が援助し、若いやもめには再婚が勧められました。教会が世話をしたのは「望みを神に置いて、夜昼、絶えず神に願いと祈りをささげて」いるやもめたちでし

た。教会は、彼女たちを援助しましたが、同時に、教会は彼女たちの「夜昼、絶えず…ささげている」祈りによつて支えられたのです。

「先進国」と言われる国は高齢化社会に突入しています。教会もまた「高齢化」しており、こどもや若者への伝道の大切なことは誰もが口にし、それを願っています。けれども、教会の高齢者も教会の霊的な資産であることを忘れてはなりません。高齢者には時間があります。彼らがつと祈りに専念することができたら、教会は大きな力を得ることができると思います。教会に若者が必要ないように、祈りに専念してくれる高齢者も必要なのです。

祈り 教会の主よ。教会で、老いも若きもそれぞれの使命を果たし、互いに支え合うことができましよう、導き助けてください。

多くの証人たちの前で私から聞いたことを、ほかの人にも教える力のある信頼できる人たちに委ねなさい。(2)

テモテは、パウロによって「信仰による、真のわが子テモテ」(第一テモテ1・2)と呼ばれています。テモテは、パウロから「教え」を受けた「弟子」であるだけでなく、子が親のものを引き継ぐようにパウロから真理と、霊的なものと、人格的なものを引き継いだ「子」でした。テモテは、パウロの「生き方、計画、信仰、寛容、愛、忍耐、迫害、苦難」を自分のものとしたのです。それで、テモテはパウロの代理者として各地に遣わされる者となりました。

現代もそのようにして、信仰者の父母から息子・娘へ、また霊的な「父」や「母」から信仰による「子」へと、真理と信仰が継承されていかな

ければなりません。真理と信仰の継承は、クラスやセミナーに参加したり、何かのコースを修了すればできるものではありません。共に主の働きに加わる中で継承されていくものです。パウロからテモテに、そして、テモテから「教える力のある信頼できる人たち」へ、さらに、そのような人たちから次の世代へと、真理と信仰は継承されて、今に至っています。

信仰は競技にたとえられますが、私たちの信仰の競技はリレー競走のようなもので、真理のバトンを次世代に渡していくものだと言つてよいでしょう。自分ひとりが競走を走り抜けばよいのではなく、信仰のバトンを渡してこそゴールに至ることができなのです。

祈り 教会の主よ。次世代に信仰のバトンを確実に手渡すことができるよう助けてください。

あなたがたが近づいているのは、…天に登録されている長子たちの教会：(23)

ヘブル人への手紙は、私たちに天上のものを見せてくれます。天の聖所で大祭司としてとりなしておられるキリストが描かれ、キリストがおられる「恵みの御座」(ヘブル4・16)へと私たちを招いています。

そればかりでなく、教会は地上にだけでなく、天にもあると教えています。地上の生涯を終えたキリスト者は天の教会に移り、天の教会は地上の教会に対して「証人」としての働きをしていると教えています(ヘブル12・1)。ですから、多くの教会は、亡くなった教会員を名簿から取り除くのでなく、「召天会員」などとして名簿に留めています。

キリストはこの天上の教会とともに再臨し、地

上の教会は天上の教会とひとつになるのです(第一テサロニケ3・13、4・16、17)。使徒信条の

「我は…聖なる公同の教会、聖徒の交わり…を信ず」というのは、天上の教会と地上の教会との目に見えないつながりのことを指しています。

「キリスト・イエスを基として」という賛美は「地上の教会は三位一体の神に結ばれ、勝利のうちに憩っている人々との交わりを持つている。彼らはなんと幸いで、聖なる者だろう。主よ、柔和でへりくだった者となり、彼らのようにとこしえに生きる恵みを私たちに与えてください」と歌っています。

祈り 教会の主よ。あなたは天上と地上の教会のかしらすです。あなたを見上げ、天の聖徒たちに倣い、天への希望によって生きる私たちとしてください。

あなたがたのうちに病気の人がいれば、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。(14)

ある教会で。それぞれに「水」と「ぶどう酒」と「オリーブ油」が入った三つのガラスの瓶が、聖餐卓に常に置かれているのを見たことがあります。水は「バプテスマ」、ぶどう酒は「聖餐」を意味し、オリーブ油は「癒やし」を意味します。良いサマリア人の譬では、サマリア人は強盗に襲われたユダヤ人の「傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで包帯をし」ています(ルカ10・34)。ぶどう酒が消毒にオリーブ油が薬として使われています。病氣の人に「オリーブ油」を塗って祈る行為は、医療と祈りがひとつとなって、病氣が癒やされていくことを表しています。祈れば病氣は治るから医療はいらないとか、医療技術に頼って神

への信賴を忘れるといったことがあってはならないと思います。

また、病氣の癒やしというものは、単なる肉体の修理ではなく、もつと全人的なものです。病氣になると、不安や怒り、後悔などが生じてきます。病氣が長期にわたると世話をしてくれる人も疲れてきて家庭がぎくしゃくすることがあります。経済的な負担も重くなります。祈りなしに、そうしたすべてのことから癒やされることはありません。病氣の人自身が祈るだけでなく、「教会の祈り」が必要です。「祈ってもらう」謙虚さをもって、癒やしを願いましょう。

祈り 教会の主よ。あなたの御名による祈りが「病んでいる人を立ち上がらせる」との約束を感謝します。御名に信賴して祈り、祈ってもらう私たちでありますように。

あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。(5)

教会は「聖霊の宮」、「霊の家」、「神殿」です。そして、神殿が礼拝のためにあるように、教会が第一にすべきものは礼拝です。教会はじつに、神への礼拝のために存在していると言ってもよいでしょう。信仰者ひとりひとは、「生ける石」となり、キリストという土台の上に、他の石と組み合わせられて聖霊の宮となっていくます。言い換えれば、信仰者は礼拝の構成要素となっていくのです。

礼拝に必要なものは、神へのささげ物とそれをささげる祭司です。すべての信仰者は「聖なる祭司」とされています。そして、信仰者ひとりひと

りは、祭司であると同時に「ささげ物」でもあるのです。きょうの箇所にある「神に喜ばれる霊のいけにえ」とは、「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい」(ローマ12・1)とあるように、信仰者自身なのです。それは、キリストがご自分を神へのささげ物とし、私たちを贖う犠牲となってくださいたのと同じです。

礼拝に「観客」はいません。旧約時代の祭司が身も心もきよめ、聖なる装いを身に着け、聖所で務めを果たすため神殿に登っていったように、私たちも、そこで祭司の務めを果たすため、礼拝に来るのです。

祈り 教会の主よ。私たちに聖なる祭司であるとの自覚を与えてください。教会を礼拝の場、祭司の群れとしてください。

また、その燭台の真ん中に、人の子のような方が見えた。(13)

「金の燭台」は黙示録1・20にあるように「教会」を表します。「金の」と言われているのは、教会がキリストによつて贖われた貴いものであるからです。キリストが「燭台の真ん中に」おられ、「燭台の間を歩」いておられるのは(黙示録2・1)、キリストの教会に対する守りや導きを意味しています。

また、この「燭台」は聖所に置かれた燭台で、劇場の照明のようにきらびやかなものではありません。神の臨在の場所を照らすもの、神の臨在を示すもので、清く、温かく、自然な光です。主が「あなたがたは世の光です。…あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良いい行いを見て、天におられるあなたがたの父をあ

がめるようになるためです」(マタイ5・14、16)と言われた通り、教会は自らがスポットライトを浴びるのではなく、神を照らし出し、キリストに光を当てる存在なのです。

燭台が常に輝いているためには、聖霊の油が必要で、またその「灯芯」の手入れ、つまり悔い改めが必要です。もし、教会がその手入れを怠り、聖霊を消してしまふようなことがあれば、キリストは、「わたしはあなたのところに行つて、あなたの燭台をその場所から取り除く」(黙示録2・5)と言つて、教会を裁くでしょう。キリストの警告を心して聞き、常に悔い改めてキリストに信頼し、従つていきましよう。

祈り 教会の主よ。あなたは「くすぶる灯芯」を消すことのないお方です。常に教会の灯芯を正し、あなたの燭台として輝かせてください。

見よ、わたしは戸の外に立ってたたいてい
る。(20)

まだクリスチャンでない人たちに、イエス・キ
リストを救い主として受け入れるようにと勧める
時、黙示録3・20が引用されることがあります。

しかし、この箇所は、まだクリスチャンでない人
に語られたものではなく、クリスチャンに、ま
た、教会に語られたものです。キリストが叩いて
いるのは教会の戸です。しかも、主は「戸の外に
立つて」叩いています。キリストは教会の中心に
おられるお方なのに、教会は、キリストを片隅に
追いやり、ついには、外に追い出してしまつたか
らです。

そんな教会は裁かれて当然なのですが、キリス
トはなおも、教会を愛して、教会に和解を申し入
れています。和解は、罪を犯したほうから申し入

れるものなのに、主の方からそれを申し出ておら
れるのです。古代には、和解が成立したとき、そ
れを確認するための「和解の食事」がありまし
た。「わたしはその人のところに入って彼とともに
に食事をし、彼もわたしとともに食事をする」と
言われているのは、その「和解の食事」です。

キリストが教会の戸を叩く音は「コツ、コツ」
という小さなものではないと思います。キリスト
はその両腕に満身の力を込めて、「ドーン、ド
ーン」と叩いておられるのです。私たちはその音に
すら耳を塞いでいないでしょうか。御霊の声とし
て聞かれる、その音を、「耳のある者」となって
聞き、主を迎え入れようではありませんか。

祈り 教会の主よ。私たちはあなたを戸の外に立
たせていないでしょうか。真剣にそのことを考
え、悔い改める者としてください。

また私は、御座と四つの生き物の真ん中、長老たちの真ん中に、屠られた姿で子羊が立つているのを見た。(6)

ヨハネは「主の日に御霊に捕らえられ」天の幻を見ました(黙示録1・10)。「主の日」という言葉は、ヨハネが礼拝の中で黙示を受けたことを示唆しています。ヨハネはパトモス島で、礼拝を捧げるうちに、天上の礼拝を見、それを黙示録の四章と五章に書いたのです。

四章では創造者である神があがめられています。五章では贖い主であるキリストに賛美が捧げられています。キリスト者の礼拝は、旧約で教えられている聖なる、創造者への礼拝に基づきながら、それだけで終わらず、屠られた子羊イエス・キリストを中心にする礼拝です。そこでは、旧約と新約がひとつとなり、「モーセの歌」と「子羊

の歌」(黙示録15・3)の両方が歌われます。天の礼拝の姿の中に、礼拝の本質が描かれています。

礼拝の形式はここ数十年の間に随分変わり、それに伴って礼拝堂も変化し、音響・映像装置が取り入れられて、劇場のようになりました。その是非は後の時代が問うことになるでしょうが、礼拝の形式が「変わる」ことがあっても、礼拝の本質までもが「崩される」ことは、あつてはならないのです。地上の礼拝が真の礼拝となるためには、それが天の礼拝を見せる「天の窓」となり、地上の賛美が天の御使いと聖徒たちの賛美と融け合つて捧げられる必要があります。私たちの礼拝がそのようなものであるよう祈ります。

祈り 教会の主よ。私たちの礼拝が「天の窓」となることができますように。

『日々の聖句』の使い方

この冊子は聖書を読み、学び、黙想するための手引で、独立した読み物ではありません。かならず、聖書を開いてその日の箇所を読み、参照箇所も開くようにしてください。

聖書の黙想には、古代から「レクシオ・デヴィナ」という方法が用いられました。それは次の四つの段階を進んで聖書を読む方法です。英語の四つの「R」を意識するとよいでしょう。

一、読む (Read) 心を静めてゆっくりと、何回でも、聖書を読みます。聖書は、神の言葉ですから、神が語っておられる声を聞くようにして読みます。

二、黙想する (Reflect) 黙想は聖書との対話です。聖書になぜこのような言葉が書かれているのだろうか。それが自分にとってどんな意味があるのか、聖書に問

い、聖書に答えてもらおうようにして、その箇所の中心的な部分を思い巡らします。

三、祈る (Respond) この祈りは、黙想によって得られたことに対する応答の祈りです。それは悔い改めや行動に結びつく決心であるかもしれませんが、あるいは、まだ解けなかつた疑問や解決していかないことがらに対するさらなる求めであるかもしれません。それがどんなものであっても、正直に祈ることが大切です。

四、瞑想する (Remain) 祈りに続いて、しばらくの間、神とのまじわりに留まりましょう。「黙想」は「聖書との対話」ですが、「瞑想」は「神との対話」です。神の臨在の中にとどまることによって、御言葉が血肉となり、祈りが生活の中で実現していきます。「瞑想する」ことは神とのまじわりに「留まり」、自分自身を神の手に「委ねる」ことと言い換えることもできます。



Penguin Club

www.penguinclub.net